

NewsLetter

No. 1 2017年10月1日

伊勢参宮ツーリズムの近代史に関する実証的研究
—御師廃止から昭和戦前期まで—
基盤研究 (C) 17K02146

目次

巻頭言	平山昇	1
共同研究のメンバーと研究課題		2
今後の活動予定		6
第1回研究会報告	田口祐子	7
【活動報告】		
講研究会	市田雅崇	9
第4回首都圏災害史研究会	谷口裕信	9
【論文】		
御師廃止後の龍大夫と旧配札地域 —埼玉県北足立郡を事例として—	谷口裕信	10

巻頭言

代表 平山 昇

本科研は、近世に全国規模で参宮ツーリズムのコーディネイターを担っていた御師システムが明治初年に廃止されて以降、伊勢参宮ツーリズムが変容していった具体的な歴史的過程について、伊勢の地域社会の史料を基幹として具体的に明らかにしていくことを目指しています。

近代の伊勢参宮ツーリズムに斡旋・誘客の立場から関わった「多様な主体」のうち、まずもって注目すべきは、1872年の御師制度廃止という大変革後に参宮ツーリズムの立て直しを図った伊勢の地域社会側の動向です。すでに明治期の神苑会や旅館業者については研究がありますが、実は、制度的には廃止されたはずの伊勢の御師が、その後も昭和10年代に至るまで各地の檀家と関係を維持し続けていたことを示す注目すべき史料群が近年発掘されました。岩井田家資料です。本研究のメンバーである谷口・濱千代・櫻井がこれまで調査・整理を手掛けてきましたが、従来の研究で明らかにされてこなかった、近代の伊勢参宮ツーリズムにおける旧御師の役割について知ることができる画期的な資料であることが明らかになりつつあります。本

科研によってこの調査がさらに進展すれば、伊勢の地域社会が御師廃止後も積極的に参宮ツーリズムとの関わりをもった歴史過程が明らかになると期待されます。

この科研は、狭い研究領域に閉じこもらない学際性が特色です。伊勢参宮にかぎらず社寺参詣をめぐる既存研究は、民俗学・宗教学・近世史研究は「参詣者（旅行者）・地域社会」に、近代史研究は「近代交通機関（鉄道）」に主として注目する傾向にあり、これら双方の視点をバランスよく組み込んだ立体的な歴史像の構築が課題として残されたままでした。このように研究対象が近接・重複しながらも相互対話が十分でなかった歴史学・民俗学・宗教学の研究者が、本研究によって、「伊勢参宮ツーリズムの近代史」という新たな研究領域を共通フィールドとして集い、学際的アリーナを形成することになれば、上記のような研究の分断状況に一石を投じることになるとともに、「お伊勢まいり」という一般にも馴染み深いテーマゆえに、研究成果の社会的還元の効果も大であると期待されます。

今後、このニュースレターを定期的に発行しつつ、社会に広く成果を公開していきたいと考えています。

共同研究のメンバーと研究課題

平山 昇（代表：九州産業大学）

HIRAYAMA, Noboru

平山は、伊勢神宮や明治神宮といった、天皇制や国家神道の文脈で「聖地」として重視されるようになった場所（主に神社と天皇陵）を訪れるツーリズムに着目して研究している。簡単に言えば、共通の「体験」とそこから得られた理屈抜きの「気分」が共有されていき、昭和戦前・戦時期のナショナリズムのあり方（知識人の言説では前面には出にくい、社会のなかでは階層を越えて広く実感・共有される感覚的ナショナリズム）と深く関わっていく—という見通しである。この問題について、政治思想的文脈（ナショナリズム）と社会経済的文脈（娯楽・ツーリズム）の双方を視野に入れて、近現代の伊勢参宮ツーリズムの活性化に、交通・旅行業界／メディア（新聞・雑誌）／教育界／神社界／実業界といった一枚岩ではない様々な推進主体が（同床異夢の関係をなしながら）絡んでいったことをとらえることができると考えている。

そこで本研究では、1872年の御師制度廃止という大変革後に参宮ツーリズムの立て直しを図った伊勢の地域社会側の動向について検討したい。すでに明治期の神苑会や旅館業者について個別論文が出ているが、本科研が対象とする旧御師家の史料を通じて、伊勢の地域社会が御師の公的な廃止後も積極的に参宮ツーリズムとの関わりをもった歴史過程（御師の継続的仲介を必須としていた近世のあり方とも、「自由な消費者がその時々に応じて旅行会社を選んでツアーを組む」という現代的なあり方とも異なる、近世から近代への過渡期ならではの真相）を明らかにできることが期待される。また、鉄道資本による手軽な参宮日帰り旅行、あるいは大正期から拡大していく小学校児童を中心とする伊勢参宮修学旅行といった近代的な参宮旅行が、旧御師の役割を代替・再編成していく過程、それにともなって、コーディネイターとしての旧御師の従来からの存在意義が変化していく過程といった点についても検討できればと考えている。

谷口 裕信（分担者・皇學館大学）

TANIGUCHI, Hironobu

①これまでの取り組みについて

岩井田家資料にはこれまで6年間、本研究のメンバーである櫻井先生を代表者とする2つの科研および学内助成の基金で関わってきた。主として目録作成作業に従事し、研究成果の一端は学会のパネル報告や資料展示会（図録の作成も含む）、論文において公表した。

岩井田家になどの旧御師家と旧檀家との関係が、御師廃止後にどのように推移していったのかを、旧檀家側に残されていた文書（岩井田家の檀那場でもある埼玉県内の家わけ文書）から読み解いてきた。一つは旧檀家が旧御師との関係を継続させたのか、それとも断絶させたのかに関して、旧檀家が参宮した際の宿泊を事例とする考察である。もう一つは旧御師が旧檀家との関係継続のために、如何なる働きかけを行ったのかに関する考察である。

②これから取り組みたいこと

①において岩井田家資料そのものを使った研究は、目録作成作業を除けば資料展示会にほぼ限定されていた。

そこで本科研においては、①で得られた知見を岩井田家資料に即して検証してみたいと考えている。目録作成作業に目途が立ちつつあり、檀家からの書簡類を使った本格的な研究がようやく可能になる。

また一方で、旧檀家側に残されていた文書に関しても、分析が未着手のものが少なからずあり、読解を進めたい。例えば信仰という観点では、いわゆる伊勢信仰にのみ着目するのではなく、三峯や御嶽などとの競合、せめぎ合いを視野に入れる必要がある。それに関連していえば、伊勢への参宮行動を遍路と比較検討する（使用する交通手段や宿泊施設など）ことも、興味深いのではないかとと思われる。

さらに余力があれば、神社神道側から見た旧檀家の存在に関する史料収集とその分析についても着手してみたい。

濱千代 早由美（分担者・帝塚山大学）

HAMACHIYO, Sayumi

岩井田家との関わりは、『伊勢市史・民俗篇』の編さん事業（2001年～2008年）にはじまり、財団法人福武学術文化振興財団助成（2010年）、篠田学術振興基金助成（2014年～）、科学研究費助成事業（2011～2013年度、2014～2016年度）等の基金によって継続してきた。

御師時代の道具類、古文書等の基礎調査、目録・報告書作成、岩井田家が檀家とする地域（北関東）の基礎調査などを行い、研究成果の一部は学会でのパネル報告や資料展示会（図録の作成も含む）、論文・資料紹介等として公表した。論文・資料紹介で扱ったテーマは、幕末の神主の葬儀、幕末から明治にかけての年中行事、幕末に伊勢で客死した参宮人に対して実施された伊勢の在地的葬法（ハヤガケ）、幕末の御師家間の縁組み等についてであり、明治の神宮改革が断行される直前の御師と檀家地域、伊勢の街のあり方を問うものが中心である。

以上は、神宮改革前の資料を用いた研究であるが、本科研においては、これまでの成果を踏まえ、伊勢の御師が経験した近代と北関東の檀家地域の経験した近代を検証していきたい。岩井田家の檀家地域は利根川流域に4県にわたって広がっている。この地域がどのような近代を迎え、その中で伊勢講の位置づけがどのように変化し、参宮行動が変化したのかを研究の課題とする。

これまでの岩井田家史料の研究は、伊勢において伊勢の資料を検討するものであった。今後は、伊勢に来た人々とその地域に目を向け、ゲストとホストの相互性を問うていくこととなる。本科研によって本資料に注がれることになった、伊勢の外から伊勢の資料を検討する「複数の目」によって、何が見えてくるのか、非常に楽しみである。

森 悟朗（分担者・國學院大學北海道短期大学部）

MORI, Goro

研究計画

近代の伊勢講である神風講社の旅宿ネットワークの変容・衰退の過程から、近代伊勢参宮の変容を考察する。特に鉄道敷設など、社会変化との関連に注目する。また、岩井田家資料に見られるような神風講社以外の伊勢講との比較対照も行なう。さらに、日本全体の近代社寺参詣・観光の展開における伊勢の位置づけに留意しつつ、考察を進めたい。

櫻井 治男（連携研究者・皇學館大学）

SAKURAI, Haruo

本年度は、以下4点の作業を進める予定である。

①「岩井田家」資料目録作成の完成協力。岩井田家資料については、谷口裕信・濱千代早由美両氏を中心に目録化作業が継続され、また順次写真撮影が進められてきた。岩井田資料は大きく分けて文書と版木・什器等のモノ資料がある。この内、後者の版木類は、岩井田家が師職として活動していた時期のもので、現在確認しているものは「神札版木」が42点、「遷宮勸進版木」が6点、その他「葉関係・神系図等」が13点である。これらは旧旦那へ頒布されたものと見做せるが、神系図には岩井田家が師職活動を中止した、明治4年の御師制度廃止後も関係を有した旧旦那等へ授与していたことも窺えるので、その状況について明らかにすることに努めたい。文書資料は、現在10,000点余の目録採り作業が進められてきたが、今後さらに進展するように支援することとしている。

②近代における「伊勢信仰」の持続と変化の問題を岩井田家資料の分析を通して明らかにすること。「伊勢信仰」という術語は必ずしも古くから用いられてきたわけではない。従前は伊勢神宮への信仰のあり方を示す場合には「大神宮崇敬」と称され、「伊勢信仰」の用語は、神宮が国家管理下から離れるようになった戦後以降と言える。この点では、「伊勢信仰」という場合、研究対象の領域や分野は広がりをもつが、前近代から近代、さらに戦前・戦後という時代的な変化のなかにおける神宮と人々の関係性を問う必要があり、そこに「伊勢信仰」の持続と変化という問題を捉える観点があると考えられる。こうした点を具体的に岩井田家資料に依りながら解明を図りたい。そのために、御師制度廃止後も岩井田家と関係を有してきた旧檀家地域の消長をマクロな観点から整理する作業を進める予定である。

③関東の岩井田家旧旦那地域において、旧来の伊勢講が再編される過程で新たに構築される組織と岩井田家との関係、あるいは岩井田家が世話役となり、記念碑等を建立した事例が見られ、その状況を岩井田家資料と現地資料との対比を通して明らかにするために現地調査を実施する予定である。

④目録化作業の過程で見いだされる、研究テーマに関連する注目度の高い資料については、情報共有を図るため必要に応じ翻刻につとめる。

鈴木 勇一郎（連携研究者・立教大学）

SUZUKI, Yuichirou

「当面の課題と予定」

- 1、これまでは近代都市史、特に郊外での都市開発や鉄道史、特に都市鉄道史などを中心に研究してきた。また、当面の仕事としてキリスト教大学史の研究もしている。
- 2、この研究会での大まかな研究テーマは「近代伊勢参宮の変容と再編成」あたりになるのではないかと考えている。
- 3、近代の参宮の変容には、鉄道の役割が欠かさないが、大きく分ると①参宮鉄道→国鉄、②大軌・参急→近鉄という二つの流れに分けることができる。
- 4、日本の鉄道にとって参詣は主要な役割の一つで、特に明治末期以降、本願寺御遠忌、式年遷宮などを通じて組織化、全国化してきた。
- 5、岩井田家文書の目録を見ると、埼玉や茨城などの北関東が中心が中心なので、とりあえず国鉄を中心に調査・研究を進めていくべきかと考えている。
- 6、当面の調査の重点は、『鉄道時報』、『帝国鉄道協会会報』や旅行案内書などに置くが、こうした全般的な動向と、岩井田家や個々の御師の動向がどのようにつながってくるのかは、現段階ではまだ雲をつかむような感じである。

谷部真吾（連携研究者・山口大学）

YABE, Shingo

民俗芸能の文化資源化とそれによる信仰観への影響に関する民俗学的研究

山口県山口市小鯖地区に鎮座する鰐鳴八幡宮では、毎年10月の最終日曜日に「小鯖代神楽」と呼ばれる民俗芸能が奉納される。伝承によると、この神楽は江戸時代に小鯖の安全繁昌・五穀豊穰を祈り、悪霊祓いをするために、村の者が伊勢にまで行き伊勢大神楽を習い、それを小鯖に伝えたのが始まりとされている。もっとも、これはあくまでも伝承であり、小鯖代神楽の起源を明らかにする史料は残念ながら見つかっていない。この神楽は、「鼻舞」という天狗の鼻高面をつけ、手にササラをもった子ども1名と、2人立ちの獅子による舞が中心である。演目は実質的に1つしかないが、注目すべきは、鼻舞が獅子役の大人の肩の上に立って舞場を1周する、「^{つぎ}継獅子」と呼ばれる所作である。継獅子の際、鼻舞は獅子頭をかぶり、右手には扇、左手には広げた唐傘をもつ。その姿は、伊勢大神楽の「魁曲」を彷彿とさせる。このような神楽、とりわけ獅子舞は、それを舞うことで幸福を招くとされている。また、かつては家を新築・改築した際、家主から依頼があれば、その家で神楽を舞い、安全繁昌を祈願するために竈祓いも行ったようである。その意味からすると、この神楽はスペクタクルなだけでなく、呪術的な要素も持ち合わせていたといえる。

小鯖代神楽は、1976年（昭和51）に山口県無形民俗文化財に指定された。これによって、この神楽は「文化的に価値あるもの」、「それゆえ保護すべきもの」として位置づけられるようになった。だが、そうした位置づけは、担い手や地域の人々の小鯖代神楽に対する認識、特に信仰観にいかなる影響を与えたのであろうか。本研究では、この点を明らかにしていきたいと考えている。

市田雅崇（研究協力者・国士舘大学）

ICHIDA, Masataka

岩井田家文書に見える北関東の伊勢講のあり方に着目し、近代における伊勢信仰について考えてみたい。民俗宗教研究的な視点から講集団に焦点をあて地域社会レベルでの諸相を描きつつ、そこに文書にみられる御師からの視点と御師の対応さらには鉄道インフラによる地域社会の変容といった外部から地域社会におよぼした力を関連させ、総体的な把握を試みる。

民俗学では各地で展開されていた伊勢講に関して多くの事例報告がなされてきた。それらは代参講という参詣のあり方から民俗宗教的な信仰を見てきたり、ムラの生活のなかに伊勢講がどのような意味と機能を持っているのかという分析がなされた。こうした村落レベルに焦点をあてた伊勢講を通じて、ムラをとりまく地域社会の信仰のあり方と変容を考察してきた。すでに桜井徳太郎が講研究の問題点として指摘しているように、こうした研究では個の特徴や社会の構造機能的な意味は見れるものの、個を超えた歴史的文化史的な全体的な力は把握しづらい。一方、宗教学では明治初期における神宮の改変にともなう伊勢への信仰とその活動の変容について、神風講などを事例として研究がなされている。こうした視点は近代の歴史的文化史的な大きな流れのなかで伊勢講のあり方を見ていく上では有効であるが、個のあり方が見えてこないのも事実である。近年ではツーリズムや観光といったキーワードを軸に両者を踏まえた分析が盛んになっている。

ここでは上述の2つの視点の結節点に講集団を置き、その講集団をとりまく地域社会の変化をツーリズムや観光という切り口から見ていくことによって冒頭の問題関心を考察していきたい。具体的に想定しているのは、(1) 岩井田家文書に描かれた北関東の伊勢講のあり方の把握、(2) 北関東における富士信仰や香取信仰といった信仰の諸相と伊勢信仰とのせめぎあい、(3) 前項(1)(2)をふくめた伊勢講の活動と伊勢への信仰の変容に果たした国鉄東北本線や東武鉄道といった鉄道の役割、である。いずれも文書調査と現地調査をあわせるかたちで進めていく。

研究計画—人生儀礼と伊勢参宮という視点から

私はこれまで宗教民俗学的立場から、現代における厄年や七五三といった人生儀礼の実態と意義について調査研究をしてきた。今回それらの調査研究のうち、①2015年に実施した大阪の神社における厄年実態調査と、②現在継続中の茨城県西地域の産育儀礼に関する調査をさらに深めて、本研究会の全体研究テーマとつなげる形で会に参加していけたらと考えている。①では厄年と社寺との関連を模索する中で、伊勢参宮、伊勢ツーリズムにつながる材料を見つけ出す作業をしてみたいと考えている。具体的にはまず先述の大阪の厄年調査でみえてきた、厄年に関する信仰がみられた特定の寺院から、氏神社を含む各地の神社へという、厄年に関する参拝行動の広がりについて、関西の交通機関という視点から検討したい。そしてこれまでの調査では考慮してこなかった生活圏という視点から厄年と社寺との関係をとらえ直してみたい。②については、以前から産育儀礼の調査を進めている茨城県西地域が、本研究会において重要な資料を提供している旧御師岩井田家の檀家地域であったことから、当地の人々の生活と密着した産育に関する信仰の変遷と影響について、近代における人生儀礼としての伊勢参宮にも留意しながら整理していきたい。

以上の問題意識をもって、次の2点を個人テーマとしたい。

- ・現代における厄年と社寺の関係についてのとらえ直し（大阪の交通機関という視点から）
- ・戦後のメディア変容およびインフラ整備に関わる儀礼産業・宗教施設の動向

（茨城県古河市・猿島郡における産育儀礼を通して）

今年度の予定

今年度は、近代における参宮ツーリズムの実態を解明する資料を収集し、その内容を読解・分析できるような研究基盤を整備し、下記日程で研究会を実施する。

日時：2018年2月18・19日

研究会の開催（於：立教大学）と北関東檀家地域の巡見等を行う。

◆今年度の重点的調査内容

【旧御師資料班】

主として「岩井田家資料」（伊勢）の調査を実施するとともに、御師制度廃止以降も岩井田家との関係を維持した旧檀家の所在地域（主に北関東）に存在する関連資料について、資料の有無も含めて調査を実施する。

【鉄道資料班】

大軌・参急（現・近鉄）関係資料として、『だいき』（大軌参急観光協会発行）および社内報、戦前の代表的な鉄道業界誌である『鉄道時報』の調査を中心に行う。

7月29日(土)～30日(日)にかけ、伊勢御師関連地の巡見と旧御師岩井田家資料についての説明および閲覧、メンバー顔合わせという内容で第1回研究会を実施した。29日には、慶長年間より明治4年の御師制度廃止まで代々御師職にあった丸岡家の現当主・丸岡正之氏による邸内の案内と説明を受けた。さらに現在作業進行中の御師資料の閲覧もさせてもらうことができた。また両日の市内巡見においては、本研究会メンバーの櫻井治男氏より各地点で詳しい説明を受けた。以下、概要を報告する。

1. 概要

【2017年7月29日(土) 伊勢市内巡見】



龍大夫邸跡(撮影:谷口)

はじめに外宮周辺の旧御師邸を中心にまわった。神宮の旧記や神書の収集に尽力した出口延佳邸跡や三日市太夫次郎邸跡など現在の市役所周辺の跡地をみた後、伊勢では「世古」と呼ばれる細い路地の奥に位置する、山田(外宮)の御師として最大規模であった龍大夫邸跡へ向かった。現在、伊勢和紙館となっているこの邸跡は、残念ながら巡見日には閉館しており、外からの見学となった。



丸岡邸にて御当主より説明を受ける(撮影:谷口)

次いで、世古をさらに進んで丸岡宗太夫邸へ向かった。現当主の丸岡正之氏から邸内の案内、説明を受けた。伊勢市内で現存する唯一の御師邸として、貴重な歴史遺産となっている邸内は、現当主の御母堂存命中まで住まいとして利用されていたという。忙しい時には四方向から使われていたまな板や、「古物商」「自転車販売」と書かれた看板から、参宮客をもてなした時代の繁盛ぶりとその後の苦境を知ることができた。最後に、現在も作業が進んでいる丸岡家の御師資料を閲覧させていただくことができた。



版木類(撮影:田口)

その後、車にて宮川の渡し跡地を見学し、内宮方面へ移動した。萬金丹小田橋を渡って、江戸時代には妓楼や芝居小屋が立ち並び、伊勢参りの人々でにぎわったという古市街道を通過、適宜車をとめてもらい、櫻井氏より説明を受けた。



宮川の渡し跡に見える旧参宮鉄道(現JR参宮線)鉄橋にて(撮影:谷口)

街道沿いにあるこの日の宿泊場所、麻吉旅館にチェックイン後、今度はバスにて猿田彦神社近くま

で移動し、内宮周辺の巡見を行なった。おはらい町通り入口近くの浦田大夫邸門（神宮少宮司職舎門）を見学し、赤福本店にて名物赤福氷で休憩を取った。その後は徒歩で新橋を渡って、岩井田邸、宇治橋、枕返、旧御師家の墓地を見学し、バスで旅館に戻った。自らの足で歩いたことで、外宮方面とは異なる傾斜のある地形を感じ取ることができた。

大変暑い中の巡見であったが、予定通りの箇所をまわることができた。

この日宿泊先であった麻吉旅館にて全員で夕食、その後も日中はできなかった意見交換や交流といった懇談の時間をもつことができた。



麻吉旅館（撮影：田口）

【2017年7月30日（日）研究会】

朝食後、麻吉旅館内に展示されている資料を見学した。麻吉旅館は嘉永4年以前の創業とされる老舗旅館であり、伊勢神宮の参拝客に宿泊と料理を提供してきた。2階の一部が資料室となっており、当時の看板やはっぴ、食器類、古文書などが展示されている。

9時に旅館を出発、この日の研究会会場である皇学館大学に向かった。途中、伊勢古市参宮街道資料館に寄り、伊勢歌舞伎や古市妓楼、当時の伊勢参宮の様子を知ることのできる資料を見学した。

10時前に皇学館大学に到着し、研究会を実施した。

最初に濱千代氏からこれまでの関連研究の経緯とそれを受けた共同研究の趣旨説明、事務処理上の注意事項の説明があった。続いて岩井田家資料の概要

について、プロジェクターを用いてすでに目録化されている分について、利用方法を含めた説明があった。次いで、それぞれ自由に資料を閲覧する時間が設けられ、櫻井氏、谷口氏、濱千代氏らから詳しい説明を受けた。

その後、参加者一人一人から自己紹介を含めた研究計画についての発表があり、それぞれの共同研究に向けての考えや取り組み方について、互いに共有する時間をもつことができた。

皇学館での研究会終了後、伊勢市駅近くで昼食後、解散となった。

2. 総括

巡見と資料閲覧と顔合わせという内容を盛り込んだ今回の研究会であったが、2日間という短い間に十分な成果を挙げられたように感じた。実際に関連する場所を訪れ、資料を手取ることから得ることができた経験のもつ意味は大きい。各自それぞれの専門や興味の違いはあるものの、御師制度廃止以降の伊勢信仰や参拝に関する動向について、岩井田家資料を中心に据えて進めていくという共通認識を確認できた。

研究会参加者

代表	平山
分担者	谷口、濱千代、森
連携研究者	櫻井、鈴木
研究協力者	市田、田口

活動報告

【講研究会】

日 時：2017年9月30日（土）

場 所：駒澤大学

参加者：市田雅崇（研究報告）・濱千代早由美

研究会の概要

講研究会は長谷部八朗駒澤大学教授を中心に、民俗学、宗教学、歴史学を研究する比較的若い研究者からなる研究会である。その趣旨は、「講」を日本の宗教文化の展開過程のなかで読み解くことによって日本社会の集団結合の特質を考えることにある。メンバーは「講」研究を専門とするものではないが、各自の研究テーマからさまざまな「講」の事例を紹介し考察をくわえて発表している。例会では講的な雰囲気よろしく、誰彼ともなく自由に発言しディスカッションできる場となっている。研究例会は月に1回行っており、また例年年末にシンポジウムを開催している。こうした研究成果は『講研究の可能性』Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ（慶友社）としてまとめられている。

この講研究会にて、市田は、岩井田家文書を用いて発表を行った。

研究報告（市田雅崇）

発表題目：「近代における北関東の伊勢講に関する覚書」

本発表では岩井田家文書の概略を説明し、岩井田家の北関東の檀那場の状況を紹介した。そのなかで事例としてとりあげたのは樋遣川村の伊勢講であり、とりわけ明治20年代に焦点をあてて考察を行った。また濱千代氏も研究会に出席し、本プロジェクトに連なるこれまでの資料収集、研究成果について紹介していただいた。参加者からは事例確認、他の地域における伊勢講の状況など多くのコメントをいただいたが、以下の2点に要約する。

【地域社会】 差出人を手代、講元、世話人など地域社会レベルでの層に応じて分け、それぞれ何を御師に報告しているのか特徴を抽出することを見てくるものはないか。また御師がいなくなった地域の伊勢信仰の動向とあわせて見ていく必要がある。

【交通】 檀那場は陸路ではなく利根川流域の水運に応じて形成されている。自然災害による伊勢参宮をとりやめる伊勢講の状況はその点から見た方が理解しやすい。その一方で鉄道が整備される背景も視野に入れる必要があり、東武鉄道との関連が指摘された。また東武鉄道では駅ごとに講がおかれ、駅長が講を取りまとめたという興味深い指摘も受けた。

総じて、これらをふまえて信仰の競合と社会変化を視野に入れつつ、書簡にみられる状況（災害などによる困窮）と講の本音を読み解き、北関東という地域における伊勢講のあり方を見ていく。

（市田雅崇）

【第4回首都圏災害史研究会】

日 時：2017年9月30日（土）

場 所：國學院大学3号館3403教室

参加者：谷口裕信・濱千代早由美

研究会の概要

首都圏災害史研究会は、首都圏形成史研究会のサブ部会であり、災害を通じて首都と首都圏の近代史を考えることを目的に、2016年に設立された研究会である。首都圏は歴史的に大規模な風水害や地震に何度も見舞われており、その被害と対策は圏域全体におよんでいる。これを学際的な見地から研究を進めるべく、研究会のメンバーによる「災害史」に関する自治体史等の調査報告をもとに、検討と議論が積み重ねられてきた。

首都圏災害史研究会へ参加したのは、岩井田家資料を研究するうえで、岩井田家の旧配札地域における災害に関する情報が必要となるからである。というのも、北関東の旧檀家からの書簡の中には、水害や電害などを理由に初穂料の延納を求めたものがあるが、そのような災害に関する情報が現状では十分ではない。首都圏災害史研究会が集積しつつある災害情報と、岩井田家資料から読み取れる情報とを組み合わせることで、岩井田家資料研究の新局面を切り開くことが期待される。同時に、自治体史等では揃いきれていない岩井田家資料のような情報は、首都圏災害史研究会が持つ情報を補完することも期待される。

当日は研究会のメンバーとの初顔合わせであったが、新規メンバーとして大変温かく迎えていただいた。当日の議論では、関東地方が自然条件的には、「首都圏」という同質性よりも、むしろ各地域の異質性を抱えていることを確認し、また災害を単に政治史・経済史的な側面からだけでなく、信仰との関わりからも見ていくことの重要性について共有した。首都圏災害史研究会が現在進めている、「災害史」に関する情報集積作業は、すでに分担者が決められており、われわれが直接関わることはないが、今後もわれわれの研究成果を提供し、研究会のメンバーとして議論を深化させていくことを要請され、その旨を了承した。

（谷口裕信）

御師廃止後の龍大夫と旧配札地域

—埼玉県北足立郡を事例として—

谷口 裕信

はじめに

本科研において取り組む課題の一つは、御師廃止後の伊勢参宮ツーリズムの展開を、岩井田家資料により実証することである。本稿はその課題への本格的な取り組みに先立って、岩井田家（御師名は岩井田右近）との比較対照の意味から、外宮側の御師龍大夫を事例として、御師廃止後の旧御師と旧檀家、旧配札地域との関係性を示す、いくつかの史料を読み解きたい。このような本稿の意図について、以下で説明しておこう。

大世古町に屋敷を構えていた龍大夫は、配札数186,000体、総収入額は4975,300円（うち止宿料は194,610円）に上る経営規模の大きな御師家の一つであり、武蔵国と下総国に主たる配札地域を持っていた。この配札地域は大別すると、一つは葛飾郡589村（武蔵・下総両国）、足立郡259村・埼玉郡192村（以上武蔵国）、香取郡246村・印旛郡236村・相馬郡161村・千葉郡97村・猿島郡87村（以上下総国）など、現在の埼玉～茨城～千葉の3県にまたがる利根川流域と、もう一つは多摩郡231村・橘樹郡93村・荏原郡93村・都筑郡84村など、現在の東京～神奈川にまたがる地域になる（『神宮御師資料 外宮篇二』）。つまり配札地域のうち前者に関しては、岩井田家の配札地域と近接ないしは重なっているのである。これが本稿で龍大夫を取り上げる理由の一つである。

とはいえ、埼玉～茨城～千葉の3県にまたがる地域に関して、すべて取り上げるには膨大な時間と労力が必要となろう。そこで現段階で史料調査を進めつつある埼玉県について、まずは見ていくことにしたい。埼玉県立文書館には、龍大夫差出の書簡や書類が収蔵されているが、それらは管見の限り、当時の北足立郡内の旧檀家と思われる家々に由来するものが少なくない。本稿が検討対象とする地域を副題のように限定した理由は、以上のとおりである。

ところで御師廃止後の旧御師と旧檀家との関係性については、その再構築という切り口から研究が進められつつある。2014年度～16年度に科研費の助成を受けた「伊勢神宮の御師廃止と参宮者の関係性再構築に関する調査研究」（研究代表者櫻井治男、課題番号26370072）は、御師廃止により御師の宗教的性格が変容して一旦は師檀関係が解体するものの、旧御師と旧檀家との関係がその後も形を変えて継続した事例を掘り起こしたものである（拙稿a、bを参照）。また旧御師の旅籠屋経営戦略と参拝者について論じた研究（ジョン・ブリーン a、b）のほか、近世期の伊勢講から近代の神宮奉賛組織への移行との対比で、旧御師と旧檀家の関係に言及したものもある（石川）。本稿もそのような立脚点を有するものであり、旧御師である龍大夫側から旧配札地域への働きかけのみならず、旧配札地域側の反応などもあわせてみていくことにしたい。

1. 龍大夫と講社・教会

明治4年（1871）に御師が廃止となって師檀関係を断たれた旧御師の中には、明治10年代になると師檀関係の再編ないしは継続に乗り出していくものもあった。龍大夫はそのような御師の一つであり、明治15年には旧檀家に対して、龍大夫を講元とする新たな講「永代大々御神楽講」の結成を勧誘する。

龍大夫はその理由として、毎年檀廻りするための資金に乏しいことを挙げており（石川）、そこで講員である「株主」が龍大夫に、一株十銭の加入料を十年に一度納入して講を運営するように「講法」に定めている。十年間毎年、龍大夫が定日に神宮を代参して神楽を奏行し（講員が定日に参宮の際は、龍大夫が同道する）、「大々御神楽剣先御祓」一体を講員へ送付することとし（一人で複数株加入するときは、「御祓」に「相応ノ土産相添」えて送付）、

「旧誼ヲ保維」しようというのである（土屋 498）。

またすでに明らかになっているように、龍大夫からのこの勧誘に応じる動きもあった（石川）。筆者が確認した限りでも、北足立郡染谷村（現さいたま市、地図参照）では明治 16 年 12 月に、土屋祐祥以下 18 名が「永代太々御神楽講」への加入者名簿に名を連ねている。名簿には「一 金拾銭 土屋祐祥」のように記入されるが、金額および氏名の二か所に押印されている者（15 名）と、全くされていない者（3 名）とが見られる（土屋 497）。押印されているのは加入料の納入者、されていないのは加入料の未納者という区別だとすると、実際の加入者は 15 名ということになるが、その後納入されたのか、未納者を除外した形で龍大夫に名簿が送られたのかは判然としない。

「講法」によれば、「永代大々御神楽講」は 10 年 1 期として運営されることになっていたから、染谷村の場

合、引き続き講に加入するならば、明治 26 年に名簿が更新されるはずである。しかし土屋家文書にはそのような史料は残っていない。講は継続していたが名簿が更新されなかったのか、名簿は更新されたが紛失したのか、染谷村の人々が講から脱退したのかなど、様々な可能性が考えられる。

さてその後の「永代大々御神楽講」については、明治 27 年（1894）7 月に開戦した日清戦争に関連した動きが見られる。龍大夫は同年 12 月に「神楽講御周旋人各位」に対して、戦勝祈願の祈祷を行った際に拝受した「御饌」を、講中の従軍家族あるいは有志に配布するよう依頼している（藤城 2317。藤城家は北葛飾郡にあり、龍大夫の旧檀家と思われるが、北足立郡内の旧檀家に対しても同様の依頼があっただろう）。龍大夫はその理由として、日清戦争は国民が「報国ノ赤誠」を尽くす機会であって、「幾年ノ久シキ多数御檀中各位ガ御恩顧ヲ辱フシ」てい



大日本帝国陸地測量部五万分一地形図「大宮」（1906 年測図・1924 年修正測図・1929 年鉄道補入・1930 年発行）をもとに補正。

stanford.maps.arcgis.com

る自身は、なおのことそれを強く意識しているからだとして述べている。講の維持を考えた龍大夫のサービスとの見方もできようが（石川）、龍大夫が旧御師と旧檀家との関係性を、「報国ノ赤誠」という言葉で正当化しようとしていたのではないか。

このほかにも龍大夫は、後備歩兵第九大隊（伊勢湾に配備された守備隊であり、伊勢神宮守護の任務にもついていた。原論文参照）本部へ清酒を四斗五升奉獻するなど（『伊勢新聞』明治28年1月9日付）、「報国ノ赤誠」を尽くす活動をおこなったことを記しておこう。

日清戦争を契機として「報国ノ赤誠」に目覚めたのは、龍大夫ばかりではない。明治27年8月11日に内宮外宮の両宮で開戦奉告が行われると、宇治山田町やその周辺町村はもとより全国各地から、戦勝や兵士の無事健康を祈願して、神楽の奉奏や御饌の奉奠を請願する者が相次いだ（『伊勢新聞』明治27年8月14日付・21日付）。宮後町の旅館宇仁館は、出征軍人の安全を祈願するために神宮へ100日間日参し、全国の市町村長へ出征者の氏名を照会したところ、「町寧なる謝状」とともに回答があったという（『伊勢新聞』同年10月28日付）。この状況は、例年参宮者が神宮を目指す旧正月頃になっても続いた（『伊勢新聞』明治28年2月11日付、引用史料には適宜読点を施した。以下同じ）。

山田市中より二見ヶ浦の繁昌は実に非常なるより（中略）山田の商人は此機を外さず客足を迎へんと、昨今外宮神域山内の天の岩戸に修繕を加へて再興の扉を開かんとし、合の山に■お杉、お玉の小屋を建増し、古市の伊勢音頭は日夜百組内外の客にて備前、杉本二樓を騒が■、有名の油屋はお紺貢十人切りの座敷を飾り立つる杯、何れも伊勢名物の再興さては手入れに忙はしく、実に近年絶へて無き好況なれば（以下略）

参宮者の増加と観光娯楽施設への相次ぐ投資とによって、宇治山田は日清戦争に関連する好景氣を迎えていたことになる。これが事実ならば、龍大夫の「報国ノ赤誠」が、こうした宇治山田における雰囲気の中で生まれてきたことになる。

龍大夫の講社、教会の話に戻ろう。これまで述べてきたように、龍大夫は旧御師旧檀家の関係を再構築した「永代大々御神楽講」を組織していたが、明治31年10月にそれとは異なる組織を立ち上げようとしていた（『伊勢新聞』明治31年10月22日付）。

今回宇治山田町の有志家龍重光、佐伯市太郎、杉木齋之助、春木昭光外十数氏の發起にて、特に神道本局の認可を得、本月十九日本県知事の許可を経て教会本院を宇治山田町大字大世古町龍大夫方に設置する事となり、近々之が開院式を挙行し、夫々役員を任命し、本月末より関東関西両地方へ職員十数名を派出し、普く信徒を募集し、大に教旨を宣布する筈なりと。

龍大夫（重光）以外の「有志家」では佐伯が旧御師家の出身であり、また龍重光の実家は同じ師職の春木大夫家であるから、春木も旧御師家出身である可能性が高い。杉木は佐伯とともに宇治山田政界で重きをなした人物である（『神都名家集』）。彼らの發起により「教会本院」を龍大夫の屋敷に置き、関東や関西方面に「職員」を派遣して布教し、「信徒」を獲得することになったという。「教会本院」が「永代大々御神楽講」のほかに、旧御師が抱えていた講が統合されたものだとすると、「信徒」獲得のために派遣された「職員」は、各旧御師の手代であった可能性もある。「普く信徒を募集」するという文言からは、「教会本院」が旧檀家以外にも目を向けていたことが読み取れる。これは三日市大夫次郎が明治33年に設立した尊皇教会が、旧檀家のみならず新規の檀家を包摂して、「師檀関係」を再編強化しようとしていた（拙稿b）のと同じ方向性であり、設立がほぼ同年代であることも含めて、興味深い動きである。

この「教会本院」との関連をうかがわせるのが、北足立郡大宮町（現さいたま市、地図参照）の白田長次郎に、「伊勢国山田 神宮敬神社事務所」から送付された、「伊勢教会本院」の会員章と、「本社」の御世話係に推仰し（中略）有志御幹旋」を依頼する書状である（白田150）。会員章の裏面には、次のような文言がある。

- 一 本教会々員ハ、常ニ敬神愛國ノ旨ヲ体シ皇道ヲ奉戴シ、邇ク皇恩ニ酬ヒ遠ク神恩ヲ謝シ奉リ、神宮ノ威靈ヲシテ万世不朽ニ伝ヘンコトヲ目的トセラルベシ。
- 一 教会員敬神ノ志厚ク常ニ参宮ノ念アリト雖トモ、遠路自由ニ其志ヲ遂グル能ハズ、仍テ本教会ハ会員名簿ヲ永世ニ保存シ、一同ニ代リ神宮ニ日参ヲナシ、神恩ヲ謝シ奉リ、尚毎年十月一日太々御神楽ヲ奉奏シ、社員一同ノ安寧ヲ祈願スルモノナリ。

- 一 教会員伊勢参宮ノ節ハ、古来吾々御師ノ取扱シ慣例ニヨリ、本院ノ設ケアル龍大夫ニ於テ宿泊ノ需ニ応シ、優待懇切ヲ主トシ、宮中其他名勝古跡ヲ案内セシム。万一病氣其他非常ノ災厄ニ遭遇スルモ、特別ノ保護ヲ受クルヲ得ベシ。

龍 太 夫

伊勢教会本院の目的と事業内容、会員参宮時の優遇について記されており、「永代大々御神楽講」のそれと比べて、会員参宮時の優遇に関する記述が詳細となっている以外は、大きく変わることはない。この会員章は、伊勢教会本院が結局のところ龍大夫によって運営されていた証拠であるが、会員参宮時に「吾々御師ノ取扱シ慣例ニヨリ」処遇するというのは、伊勢教会本院設立時の「有志家」に、龍大夫以外に旧御師家出身者がいることを、暗に示したものだともいえよう。

また「有志御幹旋」を依頼する書状には、「本年秋季長くも伊勢両大神宮式年後遷宮の大祭奉挙あらせらるゝに付き」とあるので、「伊勢教会本院」（龍大夫）からの接触が明治42年（1909）であったことが分かる。「伊勢教会本院」は、少なくとも明治31年の設立からこの時までには継続していたことになる。その後については、今後の調査を俟ちたい。

2. 旧御師のせめぎあい

前節においては、龍大夫と旧檀家の両者に即して、その関係性に関する史料を検討してきた。本節では龍大夫と旧檀家との関係に、他の旧御師の動向を絡めながらみることにする。それでは以下、北足立郡高畑村（現さいたま市、地図参照）の若谷八郎右衛門に宛てられた書簡を検討していこう。

【史料1】（若谷 1963）

記

- 一 伊勢国龍大夫祓料集金

右は龍大夫手代式名ヨリ依頼ヲ受候間、此使者へ御心置ナク御渡被下度候也。

十八年十一月廿七日

龍大夫手代旅宿

岩槻町 足袋甚（印）

高畑村

若谷八郎右衛門様

【史料2】（若谷 2796）

前又大略。甚寒之節、御家内様御壯健奉賀候。先般御依頼申上候御神楽講御加入御村方御取極メニ相成候哉、御尋旁以使申上候。人名相定り候得は、則御祓為持■■候間、御受取被下宜敷御配当奉願上候。御加入金人名帳此人え御渡シ可被下様、御願申上候。

何れ参上仕貴面万々御礼可申上候。早々頓首

一月十八日

岩槻足袋甚にて

龍大夫代理

宇仁平造（印）

若屋（谷）八郎右衛門様

若屋（谷）佐吉様

【史料1】は龍大夫から配札を受けた八郎右衛門に対して、その代金を請求したものである。龍大夫の手代が檀廻りをするときの定宿と思しき「足袋甚」から、八郎右衛門へ「使者」（「足袋甚」の従業員か）が派遣され、代金を支払うように求めている。「龍大夫ノ手代式名」は八郎右衛門の高畑村以外の檀廻りに出かけてしまい、「足袋甚」に集金を依頼したのだろうか、このような手代と定宿とのつながりについては、岩井田家資料を分析する上でも重要な論点の一つとなる。

【史料2】は龍大夫「代理」の宇仁平造が、高畑村における龍大夫の「御神楽講」への加入勧誘に関して、八郎右衛門らにその首尾を照会している書簡である。講への加入者には「御祓」を授与することを伝えたくて、この書簡を携えて来た人物に講への加入金と名簿を渡すように依頼し、宇仁がいずれ直接御札を申し上げるつもりであると結んでいる。八郎右衛門らは「御神楽講」にこれから加入する運びなのだろう。

すると【史料1】はすでに配札を受けているので、「御神楽講」に加入後のことではないかと思われる。【史料1】が手代の定宿から出されているのに対し、【史料2】は手代自ら発簡していることもそのことを裏付けている。したがって時系列で言えば【史料2】→【史料1】の順であって、【史料2】は明治17年以前である可能性が高い。

【史料1】と【史料2】からは、八郎右衛門ないしは高畑村は元来龍大夫の旧檀家、旧配札地域ではなく、この時点からの新しい「檀家」ということになる。それではもともとの旧御師は誰だったのだろうか、次に【史料3】を見てみよう。

【史料3】(若谷 2797)

向寒御座候処、先以御尊君ヲ初メ、御村方御一同衆中様御揃愈御壯建(健)珍重不斜、奉賀上候。陳は永代大々御神樂加入件ニ付毎度手代差向ケ、御厚精之御世話相ニ相預リ、万謝申述候。例年通り本年も不相替出張致させ申候間、幾久敷御世話被下度奉願候。扱又いせ御参拝相成候節は、何卒当方へ御入宿被成下度、偏ニ奉願置候。猶近日寒冷甚敷候事故、折角御厭イ御無事御凌之程、遙ニ奉祈候。先は右御願旁如斯ニ御座候也。頓首

十六年十月十五日 伊勢内宮 腹巻大夫(印)
高畑村
若谷八郎右衛門様
御村方御一同衆中様

差出は内宮側の旧御師腹巻大夫である。腹巻大夫が組織している「永代大々御神樂」講に関して、八郎右衛門方へ例年と同様に手代を出張させることを知らせる書簡である。手代の出張への「御世話」が何であるかは判然としないが、例年の「御世話」に感謝し、本年(明治16年)以降も「御世話」いただきたいとあるので、「永代大々御神樂」講へ継続して加入することを指しているものと思われる。また八郎右衛門らの伊勢参宮時には、腹巻大夫で宿泊することも念押ししている。

腹巻大夫の「永代大々御神樂」講については、すでに前稿で紹介したように(拙稿a)、腹巻大夫は「加入仕法書仮帳」によって、講への加入を勧誘していた。おそらくその勧めに応じたのであろう、「永代大々御神樂加入金並ニ永代御祓通送料」50銭の領収書(明治14年12月25日付)が若谷家文書に残っている(若谷2047)。八郎右衛門ないし高畑村が腹巻大夫の旧檀家、配札地域だったかどうかまでは定かではないものの、少なくとも龍大夫よりも早くから腹巻大夫との関係があったことは間違いない。

【史料1】～【史料3】を総合すると、八郎右衛門ないし高畑村には腹巻大夫が接触を図り、その講に加入させることに成功していた。そこへ龍大夫が接触を試みて、その講に加入させることにこれまた成功したことになる。ここで八郎右衛門は、腹巻大夫から龍大夫へと移行したと見るべきなのか、腹巻大夫と龍大夫とが両立していたと見るべきなのかが問われることになる。

【史料4】(若谷 2731)

向寒に御座候処、先以御安泰奉賀上候。次に私方無

異罷在候間、乍憚御休神思召可被下候。偕例年之通り手代共出張為致候間、不相変御厚情偏に奉希上候。猶明春ハ御地諸君夫々様伊勢御参宮之御催しも御座候ハ、不相変従来之御厚縁を以当方家へ御指図御案内之程、是又願上候。先ハ御願旁時候御伺迄、如此御座候。頓首

廿七年十一月 伊勢国度会郡宇治山田町大字今在家町
宇治橋西詰
元神職 腹巻大夫事
当時参宿所姓 大橋館(印)
若谷八良右エ門様

【史料4】は腹巻大夫を名乗る大橋館からの書簡である。例年通り手代を派遣するので「不相変御厚情」(【史料3】の「御世話」と同様に、関係性継続の意か)を求め、旧高畑村(明治22年の町村合併で野田村となる)の伊勢参宮予定者に、「不相変従来之御厚縁」のある大橋館(腹巻大夫)への止宿を促すよう要請している。

【史料3】と【史料4】とは、内容的にはほぼ同じであり、【史料1】と【史料2】がなければ、八郎右衛門は腹巻大夫の「檀家」であり続けたとすっきりと理解できたであろう。あるいは逆に【史料1】と【史料2】だけを見ていけば、八郎右衛門が明治期に龍大夫の「檀家」となったことにのみ、注意が向けられてしまっただろう。

つまり【史料1】～【史料4】を通してみることによって、先述した八郎右衛門ないし高畑村の「御師」が、御師廃止後どのように推移したのか、という問題がそれほど単純なものではないことが見えてくるのである。しかも現時点では、龍大夫と八郎右衛門との関係性を示す史料を、【史料1】の明治18年以降のものを見出せていない。現状では解釈を一通りに定めることが難しい。以下の(A)～(C)に示すように、解釈の可能性は少なくとも三つは考えられる。

- (A) 腹巻大夫→龍大夫→腹巻大夫
- (B) 腹巻大夫→腹巻大夫・龍大夫→腹巻大夫
- (C) 腹巻大夫→腹巻大夫・龍大夫

解釈の一つの可能性は、腹巻大夫から龍大夫に移行したものの、腹巻大夫に回帰したというものである(A)。もう一つの可能性は、腹巻大夫は常に「御師」であり続けたが、龍大夫も「御師」となったというものだ。これについては、龍大夫がその後「御師」ではなくなったケース(B)と、引き続き「御師」であったケース(C)の

2つが考えられよう。

旧檀家が関係性を結ぶ旧御師について、(A)は単一であることを前提にしている。一方(B)と(C)は、複数でも可であるとの前提に立つ。ただし(A)と(B)については、八郎右衛門ないしは高畑村が龍大夫を「御師」として選択し、またその選択をなぜ放棄したのかについて説明しなければなるまい。裏を返せば(A)については、腹巻大夫からの離反と回帰に関する理由説明が求められる。また(B)と(C)については、御師制度の廃止でとの師檀関係が流動化した影響、あるいは内宮側の「御師」と外宮側のそれとに対する「檀家」側の認識のされ方(実際、腹巻大夫は内宮側の御師、龍大夫は外宮側の御師)などについて説明する必要があるだろう。

ともあれ確実にいえることは、御師廃止後においては「檀家」をめぐる、旧御師たちのせめぎあいが存在し、龍大夫と「檀家」との関係は、決して固定的なものではなかったということである。

おわりに

本稿は、外宮側の御師龍大夫が明治15年に「永代大々御神楽講」を結成し、それを通じて旧檀家との関係を再構築しようとしたことに関して、いくつかの史料を読み解いてきた。本稿で明らかになったことは以下のとおりである。

1点目は、日清戦争当時に龍大夫が旧檀家との関係を、「報国ノ赤誠」という言葉で表現していたことである。日清戦争が開戦となると、神宮へは開戦奉告の勅使が派遣されたほか、戦勝祈願などのための参拝者が相次ぐ状況にあって、龍大夫は「報国ノ赤誠」を意識せざるを得なかったのだろう。出征兵士を送り出したかもしれない旧檀家への配慮とも言えようか。

これに関連して付け加えるならば、日清戦争による参宮客の増加にともない、宇治山田では観光娯楽施設への投資を呼ぶなど好景気であった。龍大夫が表明した「報国ノ赤誠」は、こうした宇治山田における雰囲気の中で生まれていたことにも留意する必要がある。というのは、日清戦争の10年後の日露戦争期において、戦勝祈願を希望者の代理で請け負う教会や講社が宇治山田では数多く設立されたからである。そのような教会講社の中には、希望者から初穂料を詐取するものも現れ、内務省はこれらを取り締まることを余儀なくされるに至った(拙稿c)。つまり日露戦争期にこのような教会講社の状況

を招いたのは、日清戦争における戦勝祈願者の増加にともなう好景気の記憶があったからではないかとも考えられる。これについては、日清日露戦争間の状況もふまえる必要があり、今後の課題としたい。

2点目は、龍大夫は明治31年10月に、「永代大々御神楽講」とは異なる「伊勢教会本院」を立ち上げたが、旧檀家のみを対象としたものではなかったことである。これは以前検討した三日市大夫次郎設立の尊皇教会が、旧檀家のみならず新規の檀家を包摂して、「師檀関係」を再編強化しようとしていたのと同じ方向性である。「伊勢教会本院」は明治42年頃までは存続を確認できるものの、龍大夫は「時勢に感ずる所あり、全家を大泉忠生氏の手に委し」たらしい(『神都名家集』)。これが土地屋敷の売却(明治33年、同前)に止まり、「伊勢教会本院」の経営に関しては龍大夫のもとに残されたのか否か、現時点では史料の制約から解答を保留せざるをえない。

3点目は、北足立郡高畑村の若谷家を事例に、関係する旧御師の入れ替わりないしは重複が見られたことである。龍大夫と「檀家」との関係は、決して固定的なものではなく、御師廃止後においては「檀家」をめぐる、旧御師たちのせめぎあいが存在したのではないか。例えば龍大夫とせめぎあった腹巻大夫は、「檀家」から50銭を受け取っていたが、これには「毎年手代を以相納め配札致させ」る費用も含まれていた(若谷1808)。これに対して龍大夫は「檀家」から10銭を受け取るだけであったが(土屋498、本稿1参照)、檀廻りに手代が十分に関与しているわけでもなさそう(前掲【史料1】)。このあたりを「檀家」がどのように判断したのだろうか。いずれにせよ、岩井田家資料を今後分析していくにあたって、旧御師のせめぎあいという問題を、十分に考慮していく必要があるだろう。

参考文献

【刊行論文・史料】

石川達也「御師制度廃止後の伊勢神宮崇敬団体に関する一考察」(『埼玉大学紀要(教養学部)』52-2、2017年)
櫻井治男「伊勢神宮の御師廃止と参宮者の関係性再構築に関する調査研究」

<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-26370072/>

同ニューズレター1～5

1 http://kenkyu.kogakkan-u.ac.jp/files/upload/kenkyu_55013a6fac886.pdf

2 http://kenkyu.kogakkan-u.ac.jp/files/upload/kenkyu_562afd41b1378.pdf

- 3 http://kenkyu.kogakkan-u.ac.jp/files/upload/kenkyu_5754d59745b39.pdf
4 http://kenkyu.kogakkan-u.ac.jp/files/upload/kenkyu_5844d73af2478.pdf
5 http://kenkyu.kogakkan-u.ac.jp/files/upload/kenkyu_59cd96d1783fb.pdf

若谷 2797「永代大々神楽加入に付」(明治16年10月15日付若谷八郎右衛門ほか宛腹巻大夫書簡)

谷口裕信 a「御師廃止後の旧御師と参宮者の関係性再構築—埼玉県を事例として①—」(上記ニューズレター4、2016年)

谷口裕信 b「御師廃止後の旧御師と参宮者の関係性再構築—埼玉県を事例として②—」(上記ニューズレター5、2017年)

谷口裕信 c「宇治山田における教会講社の展開—日露戦争前後の事例から—」(『皇學館史学』23、2008年)

ジョン・グリーン a「神都物語—明治期の伊勢—」(高木博志編『近代日本の歴史都市—古都と城下町』思文閣出版、2013年)

ジョン・グリーン b『神都物語—伊勢神宮の近現代史—』(吉川弘文館、2015年)

原剛「伊勢神宮の防衛」(『明治聖徳記念学会紀要』15、1995年)

皇學館大学史料編纂所編『神宮御師資料 外宮篇二』(皇學館大学出版部、1984年)

三谷敏一『神都名家集』(1901年)

【未刊行史料】(いずれも埼玉県立文書館収蔵)

土屋 497「伊勢両社永代大々御神楽一期加入連名簿」

土屋 498「永代大々御神楽講」

藤城 2317「征清軍隊大捷之御祈祷二付」

白田 150「伊勢国山田神宮敬神社世話係推仰状」

若谷 1808「永代大々御神楽加入仕法書仮帳」

若谷 1963「伊勢龍太夫祓料渡方に付」(明治18年11月27日付若谷八郎右衛門宛足袋甚書簡)

若谷 2731「伊勢初穂に付」(明治27年11月付若谷八郎右衛門宛腹巻大夫書簡)

若谷 2796「神楽講加入祓物渡方に付」(年欠1月18日付若谷八郎右衛門ほか宛宇仁平造書簡)

News Letter No. 1

伊勢参宮ツーリズムの近代史に関する実証的研究 —御師廃止から昭和戦前期まで—

基盤研究 (C) 17K02146

2017年10月1日

編集：谷口裕信 (皇學館大学)、濱千代早由美 (帝塚山大学)

発行：平山昇研究室

〒813-8503 福岡県福岡市東区松香台2-3-1 九州産業大学商学部観光産業学科

URL : <http://www.kyusan-u.ac.jp/research/presentation/nletter/index.html>
